2021 年 3 月 31 日

コロナ禍の中での 11 年目

神奈川大学 松本 太

2020 年は誰の思い出の中でも忘れられない年となると思います。私の中でも、これまでとは全く違った 1 年になりました。4 月から 7 月ぐらいまでは、学生は登校せず、授業の準備を誰とも話をせずに黙々と行う日々が続き、夏になると M2 とドクターの学生が登校できるようになりましたが、あまり接触しない形での研究活動となりました。秋からすべての学生が登校できるようになり、密にならないように登校スケジュールを決めての登校となりました。卒業研究、修士論文発表ができる程、データがでるのかを心配しながら日々をあくせく過ごす日が続きました。

その中で、私は2019年までの日常と同じ生活習慣で過ごすことを常に考えながら、毎日、学生が来ない、あるいは少人数しか来ない大学に通い続けました。移動や会議などが激的に減ったことから、授業の準備に時間を取られましたが、多くの時間を研究活動に使うことができました。これまで棚上げになっていた論文の執筆を行い、人生で初めて、自分で書籍を書き上げました。研究活動においては、これまでの仕事をまとめるための重要な時間になったことは間違いないところです。研究室の成果としては、郡司さんが電気化学会と表面技術協会の進歩賞をダブル受賞したことと、落合君、渡邉君がポスター賞を取ったことなど、例年通りの成果を上げることができたと思います。

これらの成果は、これまでの研究活動の蓄積によるものであり、本当に苦しいのは、2021 年からであると思います。2020 年度をどのように過ごしたか？それがじわじわ効いてくるのがこれからです。この 3 月に多くの大学院生が修了し、研究室を離れます。2020 年の研究活動があまり行えなかったことにより、M1 の学生でも、これまでのような研究の経験がありません。すべての学生にもう一度、研究を一から教える必要があります。このような状況でも、これまでの研究を見直して、次の研究への時期であると考え、努力していきたいと考えています。幸運にも 2 名の中国からの留学生が研究室に加わり、長期的な観点からの研究が行えそうな状態になってきました。体の衰えは感じますが、頑張っていきたいと思います。

学生が戻ってきた構内の風景 2021/3/30